

5月28日(日)、29年度定期総会および中央地区研修会がとちぎ青少年センター(アミークス)で行われました。

総会報告

星理事長より開会挨拶があり、虐待や子ども達の生活環境の悪化など、まだまだ何も解決されていない。目の前に追われながらも、変わりゆく状況をしっかりと見据え、進むべき方向を探りながら前進して行かなければならないという話がありました。

星の家スタッフの石田さんより、定足数38名(平成29年3月31日現在の正会員数187名)のところ、本日出席の正会員数20名、委任状95名で総会が成立しているという報告があり、議長に横松晃氏、議事録署名人に松山智子氏、檜山康子氏を選任して議事に入りました。

第1号議案 平成28年度事業報告並びに収支決算について、福田事務局長より説明がありました。自立援助ホーム「星の家」、ファミリーホーム「はなの家」、子どもの居場所「月の家」の運営についても説明がありました。

監事の小堀泉氏より、平成29年5月24日に星の家で実施した会計監査の結果「適正に処理がされている」との報告があり、全会一致で第1号議案は承認されました。

第2号議案 平成29年度事業計画並びに予算案についても福田事務局長より説明があり、今年度は設立20周年ということで、7月15日に20周年記念式典を開催するとの話がありました。

「星の家」、「はなの家」、「月の家」の現状についての話もあり、事業計画、予算案についても全会一致で可決されました。

本日出席の監事の宇賀神慶子氏から質問がありました。

総事業費の中で、人件費が50%を割っていること、運営資金がない状態で年度が始まることは、非常に危険な事業運営だと感じる。これを解決するためには、行政への働きかけと支援がない中で新規事業(アフターケア)をきちんと整備し、会員の出席を含め、もう少しみんなで盛り上げていかなければならないという質問でした。

これに対し星理事長は、何も無い所から始めて20年やってきた。予算の桁が違ってくる歴史の中で、ここまでやってきたからには、自覚を持ってきちんとやっていかなければならないと改めて思った。色々新規の会員さんを増やしたり、支援の輪を広げていくということが支える会の始まりだったから、そういう所をもう一度初心に戻ってやっていきたいと話されていました。

横松氏のスムーズな議事進行により全ての議案が原案どおり可決され、横松氏が議長を降りられました。横松さん、ありがとうございました。

研修会報告

「子どもの居場所を考える～私が駄菓子屋をつくった理由(わけ)～」をテーマに、群馬県で駄菓子屋をされている谷崎誠さんが講演をして下さいました。



今、群馬県で会社を経営していて、会社の目の前に小学校、中学校、児童館があって、そこに通う子の中に2～3歳ぐらいの子を、自転車に乗せている姿をよく見かけていた。ある時、「何でなの？」と聞いてみると、「帰っても子どもだけ。親は居るが仕事で一緒に居ない。」ということだった。特に何かをしている訳ではないが、親が見ていない時間が多くなると、同じような子達と夜中から明け方まで公園に居る。ただつまらなくてふらふらしてしまう。でもそれは、子どもが悪い訳でも環境が悪い訳でもない。そう思った時に、何か手助けは出来ないか、関わればこの子達は夜中公園に行く事はないのか…と考え、相談をしにお世話になった星さんの所へ。星さんから「始めてしまったら辞めてしまうことが一番良くないから、自分が続けられてどうにか出来る範囲で。」とアドバイスをされ、どうしようかと考えていた時に

美帆さんから、「お菓子やジュースがあると人って集まるのよ。」と言われ、「駄菓子屋なんかがいいんだよな。」の星さんの一言で、駄菓子屋をやろうと思った。

始めてみて、悪ガキなのか、色んなことをしでかす子がいっぱいいて、物を壊したなど一対一で話をして済むことであれば、注意をする程度で終わりですが、人様に迷惑がかかることをした時は本気で怒ります。ある男の子が他の人に迷惑がかかることを何度もして、その都度怒っても止めず、出入り禁止になった。しばらくして来るようになったその子に、みんなに謝ろうよと何度も促し、4、5回目でやっとみんなの前で”ごめんなさいとありがとう”が言えた。きっとその子はきっかけを待っていた。そのきっかけを与えられて、きっかけがあれば人は動くと確認できて、駄菓子屋をやっている良かったなと思った。

シンポジウム報告

コーディネーター
パネラー

福田雅章(本会事務局長)
星 俊彦(本会理事長)
中野謙作(昭和子ども食堂+寺子屋)
谷崎 誠(会社経営)
(谷崎夫妻)

福田:谷崎さんが話された、何もしない、安全を保障する、リラックス出来る場所、子どもが安心出来る場所を提供するというのは、子どもと関わる仕事の人が一番苦手とすること。子どもに関わろうとする時、何かをさせなきゃ、こんな風に変えていかなければならないと思ってしまう。施設で暮らしていたという経験の中で、自分がリラックス出来るか、自分の時間が持てるかが重要だなと改めて理解出来た。

星:最初に思ったのは、近くに変なおじさん(谷崎さんのような)が居ると、子ども達は楽しいだろうな。昔、そろばん塾に小学生の頃通っていて、そろばんの先生がとても面白い人だった。今で言うレクリエーションの指導員のような人で、手品をやったり、ゲームをやったり…みんなそろばんよりも遊びが面白くて通っていた。卓球台なんかもあって習っていない子も集まって、たまり場になっていたのを思い出した。

社会的養護の仕事をしていいますと言うと、とにかく一生懸命勉強して専門性を上げて、良い仕事をしなさいと思ってしまい、それは私自身まだ解決していないが、仕事で子どもは育つのかと思っている。仕事ではない部分で子どもと関わってきたような気もする。地域社会の中で、子ども達が包まれて安全安心な環境になって、自分にしっかりと向き合ってくれる大人がいる。これをみんなで作っていかねばいけぬ。制度で作るのではなくて、自分たちで必要なものを作る。そういう視点を持っていかねばいけぬと思った。

中野:安心、安全はキーワード。子ども達にはとにかく、ここに居れば大丈夫だから、学校に行かなくていいから、自分の好きなことが出来るから、安心して。と話をす

る。子ども達にずっと、ここは安心、学校は行かなくていいと言い続けていたら、子ども達の中から、学校戻ってもいいかな…という言葉が出てきた。

子どもが気軽に行ける駄菓子屋のような所が地域にいっぱいできてくることが、地域の中で生きていく上で大きな意味がある。